ドイツ、ポーランドを訪ねて

安井伸郎（帝塚山短期大学）

1994年7月、私は有機硫黄化合物に関する国際会議 (International Symposium on the Organic Chemisty of Sulfur) に出席するため、旧東ドイツ内にあるメルゼブルクという小さな町を訪れた。そしてその帰途、ポーランド科学アカデミー M. Mikołajczyk 教授の招きでウッジというポーランド第二の都市に立ち寄る機会を得た。ここでは、日本人観光客の余り訪れない土地を巡ってきた私の印象記をまとめてみたい。

大阪空港（伊丹）を飛び立ったルフトハンザ機は、香港を経由し約18時間かけて、ドイツ、フランクフルト空港に着陸した。初めて見る空港の広大さにとまどいながらベルリン行きの便に乗り換え、1時間ほどでベルリンに到着した。ベルリンの空港は貧弱と言えるほど小さなものであったが、空港の前から乗ったタクシー（もちろんベンツ！）は快適そのもの。しかも、運転手は私がドイツ語をまったく話せないことを知ると、なまりのある英語でホテルまでの道すがら町の観光案内をしてくれた。とにかく、この運転手のおかげで私のドイツ - ポーランド訪問はきわめて快く始まったのである。

ベルリンにて

ホテルは、旧西ベルリン地区内の最大の鉄道駅、ツォー駅（正式には "Zoologischer Garten" 日本語に訳すと「動物園」駅）のすぐ近くにあった。このあたり、駅を出た列車がガードの上をゴトンゴトン通り、道行く人たちの顔だちと言葉さえ気にとめなければ日本のどこかの町にいるような気さえした。さて、フライトの関係で学会の始まる二日前にこの地に着くことになった私は、次の日の日曜日をベルリンの市内散策に当てることにした。まずそのツォー駅前にプレハブのような観光案内所をみつけ、市街地図をもらってバスの乗り方を教えてもらい、早速、「壁崩壊」の時に幾度となくテレビで目にしたブランデンブルク門に向かった。想像していたのとうらはらに、門付近は道端にじかに品物を並べた「露店」がずらりと並び、アイスクリーム売り、コーラ売り、それに手回しオルガンを鳴らす人もいてにぎやかこのうえない。何を売っているかと見てみると、Tシャツ類にまじって「壁」のかけら（本物？）、ナチス風の軍服みたいな服などあやしげなものもある。そして、ロシアからの出稼ぎか、ロシア名物のお人形さんを並べている人もいる。カメラをぶら下げた人々がぶらぶらし（私もその一人だが）、まさにここは観光地そのもの。かつて東西を隔てる「壁」の象徴としてさまざまな思いで眺められていたであろう「門」、そしてあの「壁崩壊」のとき人々が異様な熱気をもってくぐり抜けた「門」、ここがそのような歴史の重みを負った場所であるとはみじんも感じられない。

ところが、門を抜けて一歩旧東ベルリン地区へ足を踏みいれると様相が一変した。建物はどれもが古くすすけた感じさえする。人通りもまばらで、ときおり通り過ぎる車もボコボコいう旧東ドイツ車が目につくようになってきた。そして、（これはここベルリンのみならず、このあと旧東ドイツ内のどこででも見ることになるのだが）旧西側地区の水準にあわせるべくそこらじゅうにクレーンを立ててビルの建て替え工事をしている。ここが確かについ最近まで、西側の我々から分断され我々の基準に従う限り「遅れた」所であったということを実感した。（ついでながら、東側へ入った途端、みごとなまでに英語が通じなくなった。）しかし一方で、旧東ベルリン地区には、そのほとんどが大戦で破壊された後の再建とはいえ数々の歴史的な建物が点在している。そして、これらの建物はベルリンのこちら側に、チャラチャラした旧西側地区とまったく違う落ち着いた雰囲気を与えている。もし、いま行われている突貫工事でこの地区の様相が西側風に変わってしまうなら、それは何か、とんでもなくもったいないような気がした。

そのあと、地下鉄（U-Barn という）、電車（S-Barn という）、バスを乗継ぎ乗継ぎしながら市内を見て回った。そして、電車の車窓と地図を見比べながら「壁」があったとおぼしき所にカメラを向けた時、前に座っていた老夫婦の、ちらと私に目を向けたその無表情の「表情」がやけに印象に残った。この人達もきっと、つらい数十年を過ごしてきたに違いない。

メルゼブルクおよびハレにて

あくる日の朝、学会用意のホテルのあるハレという所へ列車で向かった。この列車は、旧東ベルリン地区にある駅を出発し旧東ドイツ内ばかりを走る。東西統一直後に同じルートをたどってハレを訪れた人の話によると、当時はかなり混乱していて切符を買うのに始まって駅に降りるまで苦労の連続だったそうである。それで、私もそれなりの心の準備をしていたのだが結果はまったくの拍子抜け。出発駅は古いながらも案内は行き届いているし、車両は新品、また線路の具合いもまことによろしいようで乗り心地は申し分なし。おまけに座席にはその列車の運行表のようなパンフレットが用意してあったので、ドイツ語の車内放送にもかかわらず降りる駅を見失う心配はなかった。という訳で、車窓から2時間余りドイツののびやかな農村風景を楽しんだのち、私は無事ハレ駅に降り立つことができた。そしてここから、列車またはバスで約30分の所にある学会会場、メルゼブルクのフンボルト大学まで通ったのだが、この途中おもしろい出来事に合うことになるのである。

ハレは古い城壁に囲まれた、いかにも中世ヨーロッパの雰囲気を残す町。作曲家ヘンデルの生誕の地で、町のへそに当たる広場に彼の像が立っている。このような風情の町は私には初体験だったので、ここに宿泊できたのは嬉しかった。一方、メルゼブルクは日本の旅行案内書にはない小さな町。ベルリンでも日本人の姿はほとんど見かけることがなかったが、このあたりまで来るともう日本人といえばこの学会関係の人しかいない。町の人には、かなり珍しい人種に見えたらしい。学会のエクスカーションでさらに小さな田舎町に連れて行ってもらった時など、日本語をしゃべりながら歩いている私たちを見た瞬間、体じゅう完全に凝固し点になった目で私たちを見つめるという町（村？）の

人たちに何度かお目にかかった。

さて、その「出来事」は学会一日目、メルゼブルクからハレへの帰途起こった。その日、学会終了後、学会プログラムの一環として市長のレセプション、古めかしい教会でのパイプオルガンの演奏など盛りだくさんの行事があり、午後９時近くになってやっとお開きになった。ところが学会用意のバスはまだなかなか来ないという。この季節、この地方では９時といってもまだじゅうぶん明るい。そこで私は、古い町並みを通って駅まで歩き、そこから列車に乗り込んだ。こぎれいな車内はガラすきで、私はゆったりと足を伸ばし学会の予稿集と窓の景色を交互に眺めていた。ところが、もうすぐハレ駅に到着しようかというその時、列車はガクンとブレーキをかけて止まってしまったのである。見ると車掌が、窓から顔を出して誰かと話している。その話し相手、線路脇にいるGパン姿のおじさんはこの列車を引っ張る電気機関車の運転手だった。やがて車掌が大声で乗客に何やら説明し始めた。説明の内容はまったく理解できなかったが、身振りからしてどうやらこの先で架線事故があったらしい。事故は事故である。日本でもあることである。だいいち文句を言おうにも言葉がしゃべれない。と、私はあきらめ覚悟を決めた。ところが驚いたことに、言葉のしゃべれる地元の人たちも誰も車掌に文句を言わないばかりか、詳しい説明を求めようともしないのである。そのうち日は落ち、あたりは真っ暗になった。それでも、一組の若い男女がときどき線路脇に下りたりしてはしゃいでいるほか、誰もかれも石のように黙っている。時折パンパンいうのは、窓から入って来る蚊をたたく手のひらの音である。私は、箱の中の残り本数を気にしながら何度も煙草に火をつけた。結局、ここで２時間余り止まった。12時近くになってやっとハレの駅に着いたときも、私の見た限り、誰も苦情を言っている風はなかった。これが旧東ドイツ内の出来事だからだろうか。

とにもかくにも、今夜はどこかレストランでおいしいものを、という私の計画はもろくも崩れ、駅前でやっと見つけた屋台のソーセージがこの日の私の夕食になった。

ポーランド・ウッジにて

ハレから第二の目的地であるポーランドのウッジまで直線距離で約 500 km。東京 - 大阪間ほどの距離である。しかし、別々の国の地方都市の間の移動は想像以上に不便である。まずフランクフルトまで飛び、そこから国際線でワルシャワまで飛び、そして最後は車でウッジまでと、地図で見ると一つの線上を行きつ戻りつする格好でこの移動に丸一日を要してしまった。

さて、ワルシャワ空港。「東」の国への入国ということで、やや緊張しながら係官（注：若い女性であった）の前に立ったが、拍子抜けするほど簡単に手続きは済んでしまった。そして、空港ロビーに出た途端、タクシードライバーが群がってきた。失礼ながら外国人である私からはどなたも皆同じ顔に見えたのだが、口ぐちに "taxi? taxi?" と問いかける中で「あなたが Professor Yasui か ?」と尋ねてきた人がこれから足掛け三日間お世話になる Dr. Jan Omelańczuk であった。ついでながら、この人の名字の読み方は日本人には不可能といえるくらいむずかしい。ここでは、現地でそうさせていただいたように、First Name でヤン博士と呼ばせていただくことにする。

空港の立体駐車場のヤン博士の車は、お世辞にもきれいとはいえない純正のポーランド車であった。荷物を積み込み、私も乗り込み、さていよいよ100 km余り西にあるウッジに向かう。暑い夏の夕方、窓を精一杯開けて、車は時速100 kmでひた走った。この広い道は、日本式にいえばまさに高速道路なのだが実はそうではなく、時折、馬に引かせた荷車の上、農器具の隣にちょこんとすわったお百姓さんがのんびり家路をたどっているのに出くわした。平ぺったく広がったポーランドの大地をどこまでもまっすぐ伸びる道、その両側のこれまたどこまでも続く並木がきれいだった。

古色蒼然たるレンガ建ての一室が科学アカデミーのゲストルームで、そこで一晩を過ごした私は、あくる日朝から研究施設を見学させてもらった。ポーランド科学アカデミーといっても、いろんな部門の総称で全国各地にあるらしい。ここには、私の研究分野と同じ有機リン化合物の研究をしている部門がある。建物は古いが、最新鋭の装置を備え中身はなかなかの充実ぶりである。ポーランドは決して豊かな国とは思えないが、やはり一流どころにはそれなりに力を入れていることが察せられた。残念だったのは、私を招聘してくれたMikołajczyk教授がおりあしく腎臓に石ができて自宅療養中であったことである。今回のポーランド訪問については、同教授にずいぶんお世話になった。ポーランドは電話事情が悪く、国際電話が思い通りにつながらない。つまり、日本とポーランドの間の連絡にはファクシミリが使えない。そういう訳で、事前の打ち合わせのために何度もお手紙をいただいていたのである。ご自宅までお伺いするのは気がひけたので、電話でお見舞いを申し上げた。

その後、ヤン博士の案内でウッジ市内を見て回った。ウッジはポーランド語でŁódźと綴る。最初の文字はエル(L)ではなく、私の耳には「ウッジ」と「ロッジ」の中間のように聞こえた。ちなみに、日本の地図のカタカナ表記は「ウッジ」「ウージ」「ロッジ」「ルージ」などさまざまである。出発前ポーランド大使館から入手した資料によると、ウッジは人口でいえばワルシャワに次ぐこの国第二の都会。とはいえ繊維工業の勃興と共に興った歴史の浅い町で、日本の観光案内書にはまったく記述がない。従って、日本人観光客はまず訪れることはないだろう。それでも、高々と尖塔を構えた教会が立ち、二両連結の市電がゆうゆうと走る風景は私には物珍しかった。案内してもらった中でとりわけ興味深かったのは、この町いちばんのショッピングセンターである。建物の中は床のタイルがあちこちではがれていたりして大分いたんでいる様子だったが、食料品はじめ物資は豊富なように見受けられた。ところで、商品の値札の数字がやたらに大きな桁数なのには驚いてしまったが、これはポーランドのすざまじいインフレのせいである。しかし、それを日本円に換算してみて、ここの物価水準が信じられないくらい低いことが分かりまた驚いてしまった。日本の100円は、ポーランドでは500円あるいはそれ以上の価値を持つ。

嬉しくなっておみやげを買い込む私に、ヤン博士の顔は心配げであった。

フランクフルトにて

二泊三日のポーランド滞在を終え、私は日本への出口、フランクフルトに戻った。ベルリンを出て以来、いわゆる「東」で一週間ほど過ごしてきた身にとって、高層ビルの

間を人や車が忙しそうに動き回る光景はめまいを覚えさせるほどのものであった。いよいよ日本近し、を感じた。そして、ここでドイツ留学中の中山先生と再会し、今回の「旅」のフィナーレを迎えることになる。

その日の朝、待ち合わせのフランクフルト中央駅にリュック姿の先生が現れた。聞くと、留学地のヴュルツブルクでは日本食のネタが手に入りにくく、今日それをここで仕入れて帰るつもりだという。お一人で留学されている苦労が偲ばれた。市内観光もそこそこに、先生の案内でマイン川の南、ザクセンハウゼン地区まで歩き、とあるレストランの戸外のテーブルに席をとった。このあたりはフランクフルトのいわゆる「飲み屋街」なのだが、さすがまっ昼間のこと、私たちのほかは入れ墨をしたおじさんの二人連れが大声でしゃべりながらビールを飲んでいるだけ。私たちは、ソーセージ料理を注文し、リンゴから作られるこの地方の「地酒」、エッペルヴォイを傾けながら久しぶりの会話を楽しんだ。思いのほかお元気で、研究のほうも順調とのことであった。（余談ながら、再会の嬉しさのあまり、私はフランクフルトの最も有名な観光スポットの一つ「ゲーテハウス」を見るのを失念してしまった。）

話は尽きなかったが、いよいよ出発の時間がせまってきた。なごり惜しげに先生に手を振る私にお構いなく、私を乗せたタクシーは静かに空港へ向かって走り始めた。

付記

以上、ドイツとポーランドを訪問した感想文を書かせてもらった。紀要の内容にふさわしくない雑文になってしまったことをお許しいただきたい。

ところで最近、ヤン博士より手紙をもらった。Mikołajczyk 教授は今では石も取れ、すっかり健康を回復されているとのことである。この夏、韓国ソウルで開かれる学会でお会いできるはずなので、今度はしっかりお礼の言葉を述べたいと思っている。

中山先生は、この紀要が出る頃にはもうこちらに帰っておられるはずである。この稿を見ながら、ドイツの話をするのを楽しみにしている。